

やまがら

昔から散髪が苦手だった。誰が生えてくれと頼んだと、反抗期男子のような叫びを飲み込み、這って向かう先は1,000円カットだ。手軽さが売りだろうに、「今日はどのように?」と尋ねられると、私は「お任せで……」と口籠ってしまう。理容師があればこれ尋ねてくれるのにヘラヘラと生返事を続けた末、「いかがですか?」と掲げられる鏡を近眼でぼんやり眺めながら「最高です」などと唱えて店を出る。これが月に一度の苦行だった。

あるとき、人の勧めで美容室に行ってみると、思った以上の反響があって驚いた。ならばと、散髪のたび野口英世3人ほどに同伴願うことにしたが、やはり主体的に髪をどうこうしたいという意欲は皆無なのだった。美容師に対しても腕を無駄遣いさせているようで後ろめたく、同じ店舗には二度と足が向かない。流浪人のように理美容室を転々とするうちに、「ひと月伸びた分だけ切って、あとは適当に梳いてくれ」という問答の型だけを磨いた、手練れの一見さんができあがっていた。

そうして初回割引を毎回行使する私だったが、近ごろついに「次も行こう」と思える“推し”の理容師に巡り合った。その理容師は、私の型通りの注文を受け、頭髪を手櫛で吟味したあと、恭しく「本当に梳きますか?」と尋ねてきたのだった。曰く、無秩序に梳くと癖毛が絡み合いかえってまとまりにくくなるそうだ。ろくにセットもしない私のような人間は、むしろ一旦伸ばして毛の長さを揃えた方が楽になるのだとか。推しの眼には、来店時の私の頭部はさながら乱伐を受けたあとのように映っていたのかもしれない。「髪型に良し悪しはありませんが」と言いつつ根曲がり、もとい生え際の癖を丹念に確認する推しを見て、林地調査に赴く森

林官もこのような目をしているのだろうかと思った。

かくして入念なゾーニングの末、一部が保安髪に指定された私の頭部には、資源蓄積を重視した禁伐施策が導入されることとなった。法正髪志向で画一的だった施業方針を廃し、目標髪型に向けた新しいアプローチが拓けたことで、私自身もその経過観察が少し楽しみになった。その日伐出された毛髪はわずかだった。しかし、意欲と能力に欠けた頭髪経営体である私には、専門知識と経験による現状の評価、方針の相談、伐採計画の提示と技術的解説という一連のサービスには、梳き鉋に勝るとも劣らない価値があると感じられたのだ。

さて、当事者意識の欠如から自分なりのマスタープランを描けず、杓子定規に施業を委託し続けた結果、私

所有者としての 自覚の芽生え

は自らの頭髪の荒廃を招いてしまった。ところが専門家によるアセスメントを受け、自身も参画しつつ方針を定めたことで、私は幾ばくかの主体性を獲得し、奇しくも積極的に頭髪管理に関わらんとする意欲すら芽生え始めている。この顛末から散髪以上のことを類推するのは短絡的すぎるだろうか。地形や気候の多様性、生物や資源の多様性、所有や境界の不明確……、諸課題が複雑に絡み合った林業を紐解く一つの鍵は、無関心な所有者の心を掴む、専門家による地道で献身的なコミュニケーションにあるのかもしれない。

ところでその後、やむを得ず帰省先で散髪することとなったが、案の定うまく施業方針を伝えることができず、前髪に誤伐が生じてしまった。なるほど、森林も頭髪も一朝一夕にはいえないわけだ。

(森の委託屋さん)